

喜怒哀楽

「喜怒哀楽」は、文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し(株)ミュージック・コーポレーション 喜怒哀楽書房が隔月発行している情報誌です。

6-7
Vol.92

CONTENTS

● 笑顔礼讃西東

新発田かりん会 (新潟県・新発田市) 2~3

谷知由紀子 (神奈川県・大和市) 4

● 詠み人スクランブル

《一番「夏だなあ!」と思う瞬間はどんなときですか?》 10~11

新潟ぶらりノ 米百俵 12

詠み人の『リレーエッセイ』 歌人 岡田幸生 16

ここに響く言葉

新潟県糸魚川市出身の批評家・随筆家 若松英輔氏の著書からここに響いた言葉を抜粋してご紹介します。

履歴書を書くとは、そこに書き得ないことを想い起こす営みだといつてよい。語り得ない人生の出来事存在に気が付くことの方が、自分が何者であるかをうまく表現するよりも、人生においては、よほど大切なのではないだろうか。——『悲しみの秘義』より

● 若松英輔

1968年生まれ、慶應義塾大学文学部仏文科卒業。

2007年「越知保夫とその時代 求道の文学」にて第14回三田文学新人賞評論部門当選。

2016年「寂知の詩学 小林秀雄と井筒俊彦」にて第2回西脇順三郎学術賞を受賞。



▲『悲しみの秘義』表紙や見返しも9種類のデザインがある

温古知新 ④⑥

「菜根譚」18

梅雨のじめじめする季節が到来!! 「温古知新」でじめじめ気分を吹き飛ばしていただけたら幸いです。

名根の未だ抜けざる者は、縦に千乗を軽んじ一瓢に甘んずるとも、総て塵情に墮つ。客気の未だ融けざる者は、四海を沢し万世を利すと雖も、終に刺技となる。

(名誉欲を捨てきれない者は、たとえ口では謙遜して謙虚ぶっていても、周囲には見抜かれている。競争心を捨てきれない者は、たとえ世界を富ませ、後世にまで恩恵を与えたとしても、結局は無駄骨になる。) 心体光明なれば、暗室の中にも青天有り。念頭暗昧なれば、白日の下にも厲鬼生ず。(心身に本物の智恵があれば、暗い部屋の中からでも青空が見える。本物の知識と理解力がなければ、真昼間から夜専門の悪魔が出てくるのと同じである。)

口先だけではダメ。欲を捨て、本物の知識を身に着けなければ、全て台無し、ということなのです。

人は名位の楽しみを為るを知りて、名無く位無きの楽しみのみ最も真たるを知らず。人は饑寒の憂い為るを知りて、饑えず寒えざるの憂いの更に甚しきたるを知らず。

(人は、地位や名誉の有ることが理想と考えるが、地位も名誉もない人が最も幸せだということを知らない。餓えや凍えが厳しいことで不安になると知っていても、十分に満たされている者の不安が最も深刻であることを知らない。)

足れば足りただけ悩みは尽きないということ。他人は気にせず、無欲でいるのが一番、ということでしょうか。

悪を為して人の知らんことを畏るは、悪中にも尚善路有り。善を為して人の知らんことを急ぐは、善処即ち是悪根なり。(悪いことをして他人に知られるのを恐れるのは、悪の中においても善の道を歩ける可能性がある。良いことをして他人に知られるのを急ぐのは、善を行った事そのものが悪の根源なのだ。)

己の善行を他人に認めてもらうことが目的となってしまうやう、律していきたくないものですね。本心から善い行いをしていきたいものです。(古川久美子)

新発田しばたかりん会

創設 島津工ミ様

代表 泉弘子様

(新潟県・新発田市)

新潟県の越後平野の北部に位置する新発田市。4月1日(土)、新発田駅前の複合施設「イクネスしばた」で行われた「かりん」(主宰 馬場あき子)の支部 新発田かりん会の歌会にお邪魔しました。

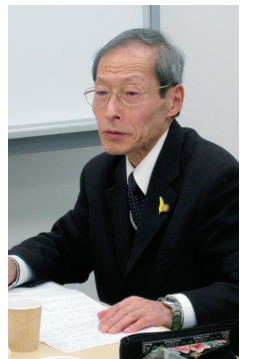
最初に本日の司会進行長谷川さんより「心のエネルギーこそ短歌の源泉、今年度も切磋琢磨して詠んでいきたい」とご挨拶。事前に配布した詠草(短歌を詠んで紙に書いたもの)を手に、各々が一首ずつ感想、意見などをつまびらかに述べていきます。

小田実の『玉碎』を読む 七十年生きて瓦全がぜんの我をかなしめ 長谷川

●調べたところ、玉碎と瓦全は反対語なんです。『玉碎瓦全』で名誉を守るために未練なく死ぬことと、何もす



▲代表の泉弘子さん 元先生とあってお話が明快でユーモアたっぷり



▲本日の司会進行 長谷川稔さん(現支部長) 笑顔いっぱいのもうどメーカー

ることなく徒に長く生きることという意味があるらしい。本を読んだ感動をどう読者に伝えるか、これは大変難しい主題であえてそこに挑戦した意欲には感嘆する。ただ、それがこの本についての歌として共感するかどうかはまた別。共感するが、テーマが大きく概括的。例えば登場人物の名前を出すとか、自分にひきつけた身近なものにした方がいい。どうしたら「そうだなー」と、しみじみ感動することができるのか。難しいけれど、全員の課題ではないか。●3、4年生の頃、玉碎の島で父を亡くした友だちがいた。子ども心にどう言葉をかけていいかわからなかったことを思い出した。「瓦全」という言葉は初めて目にした。●玉碎は何の意味もなかった、つまり戦争がいかに無駄だったかというの、小田実のテーマ。そうすると、上の句と下の句が結びつかない。●「かなしめ」は命令形。ここまで真面目というのか、大きく考える必要はないのではないかと

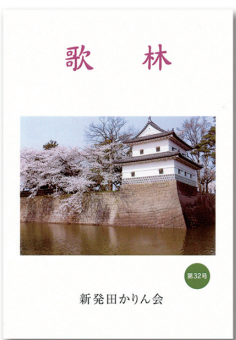
さやかなる列車の音のとどく夜だれか 発つらむ遠き銀河へ 泉
●音だけの世界の歌、結句の「遠き銀河へ」で夢のような一首になった。●幻想的ないい歌。静かで風もなく響いてくる列車の音、こういう夜にどなた

かが亡くなったという鎮魂の歌だと思った。●「さやかなる」がキーワード。さやかだから、いいことにつながる音かなと。ファンタジックな歌で、銀河鉄道にイメージした。下句で誰かが美しい旅に出かけるんだらうなという、美しい余韻を残した。●さやかなるは、さわやかではなく「冴える、明らかかな、はっきりした」という意味。幻想的な「遠き銀河へ」という下の句は、澄み切った気持ちで旅行をするでもいいし、誰かを悼むでもいいし、いろんな意味にとつていいと思つた。

長病みの妻の歩みに合わせつつ花店廻る彼岸間近を 大沼
●長病みの妻と思ひやりのあるご主人。「ま」の音が多くて心地よく読める。●自然体で穏やかな境地をさらりと詠んでいる。言葉の一つ一つがよく考えて配置された、気持ちのいい歌。●花店廻るより、花屋を回るの方がしっくりくるような気がする。ルビを「はなや」とする方法も。●彼岸になれば花も要るし、わかりやすく具体的に季節に合ったいい歌。

そこはかとたゆたい初めぬ暖かさここ 弾みて種買ひに行く 島津
●ここはかとたゆたい初めぬ暖かさここ 何となくそこはかと漂ってくる暖かさ、心うきうきの春先の陽気が見えるよう。●「そこはか」と「たゆたい」と「あたたかさ」がまさしくその通り。●「そこはか」と「たゆたい」はどちらも曖昧な言葉。この曖昧さは、雪国の人じゃないと肌を感じないというか、作者もこの言葉を使わないと感じが出ないということまで言うのだらう。ただ、「こころ弾みて」まで言うのだメ押しになる。それ以外の言葉を使ってほしかった。●「初めぬ」は終止形、「暖かさ」につながるなら「初めぬる」または「初める」としなないと。そこはかとたゆたっていること自体、初めぬまで言わなくていい。●具体的なものがない。雪国であれば、そこに強い気持ちが入ってもいい。

終活の覚悟きめたりピラカンサ雪の重みで倒れ伏すなり 下村
●倒れ伏しているピラカンサを見て、自分のこれからの思い、本気で終活しなきゃと思つたのか。●「就活」や「婚活」という言葉はどこまで許せるのか見極めに悩む。ファミリコンコンピュータがファミコン、スマートフォンがスマホと呼ばれるように、使用頻度が高いとどんどん日本語化されてその省略語が常識になる。●それは大事な問題。みんな日本人だからわかるが、これが他の国で使われたらわからない。大勢が使用する言葉だから歌としていいかどうかは違う問題。安易に使わないで、使うときは覚悟して使わないと。●辞書に「就活」はあるが「終活」はない。「老々介護」も辞書にはない。いい問題提起。●「決めたり」で切れ



▲年一回発行の「歌林」も32号。表紙は新発田城。地道に一步步

て、ピラカンサの赤が出て次は雪の白、それが倒れた。すごくドラマチックで色彩も豊か。「終活」を除けばおもしろい歌。●「なり」と「たり」の完了。きっぱりと決めましたという宣言。あえて強い言葉を使って覚悟のほどがわかるが、難しい言葉を使っていると感じた。つながりがわかるようだが、歌として成功するかどうか。●ピラカンサの終活かと感じた。●自分の老いとピラカンサのダブルイメージを具体的な囁目で表現した。

夜もすがらボールの中でプチ呼吸アサリたちは朝の出番待ちおり 湯浅

●プチ呼吸で、アサリのイメージも浮かんでくる。ただ「朝の出番待ちおり」で、果たしてアサリたちは待っているのだろうか、多少ぎよつとするものがあった。●「夜もすがら」は、言葉として重い気もするが、アサリたちになれば自分たちの運命もかかっていることなのでこれでいいと思う。●この詠草をいただいてからアサリを買ってきたが、閉ったままでプチ呼吸は見られなかった(笑)。プチと夜もす



▲一昨年入会したばかりという大沼さん(左)と下村さん



がらで不釣り合いなおかしさもあり、その点では成功している。●字余りにした意味があるのかどうか、定型を大事にしてリズムに乗るよう努力したいところ。●歌は余韻を楽しむという部分があるが、悪くいえば後味の悪い歌。できるだけ気持ちのいい歌を作りたい。

桜貝のやうな花びら並べてみるいちご 太らせかそかにほへり 佐藤

●いちごの実と花に向き合い愛おしんでいる作者。具体的な観察がこの歌を豊かにしている。●上の句と下の句で主語がかわっている。上が自分で下が花びら。素敵な歌だが、よく推敲して整理しないとわかりにくい。いちごを太らせておっているのは花びらだから、例えば「並べ見る桜貝のやうな花びらはいちご太らせかそかにほへり」とか、花びらとほへりを近くに置きたい。●花びらがいちごを太らせているという解釈？花びらはいちごを太らせないでしょ。太らせるとき既に花びらはないわけだし。子房が太るから実になる。詩的に聞こえるけど生物学的にはそうでない。

案ずるは非常識かと思ひ来しを現実と なる鰯釣り事故 田辺

●報道であった事故のこと。ニュース性のあるものを歌に詠みスピーディーだが「非常識」以外の言葉はなかったのか。●時事詠の場合、(一)として詞書※があればわかりやすい。事故と自分の関係性がどこかにないと、差し迫った歌とはならない。悪くすれば

新聞の標語みたいになる。●あえてニュースを取り上げたのなら、事故と自分との距離をいかに縮めて詠うか、取り出して詠うかが、勉強であり課題。●もし氷が割れたら…と誰もが想像することなので、非常識というより不見識。

※和歌や俳句の前書きとして、その作品の動機・主題・成立事情などを記したものを

ピポーピポーがわが家の近くで鳴り止みぬ止みたるままに静もれる真夜 小熊

●情景はよくわかる。ピポーピポーはこれでいいの。●ピポーピポーは「」で囲めばいいのでは。ピポーではなくピポー。ピポーもスマホと同じで日本であればわかるが、他では通じない。救急車は、無駄だと判断された場合は静かに帰っていくとか。それが真夜であれば出ることも躊躇されるし、助かったのだろうかという不安な気持ちの下から伝わってくる。●「止みたるままに静もれる真夜」は確かにそうだが、作者の心に迫るものであったのか、静まったなという程度の気持ちだったのか、あるいは胸がどきどきして動悸がするほどだったのか、つきつめて考えるところが動く気がした。●音と夜の歌だが、二番目の「遠き銀河へ」の歌とは対照的。

ユキノシタ雪につぶれてぺしやんこで 春のはじめの光合成だ 原

●口語を使ったリズムのいいおもしろい歌。●光合成だ、で非常に活発で明るい元氣な歌だと感じたが、ぺしやんこで、とその下とのつながりに疑問が残った。●ぺしやんこのまま

に、という意味に捉えたらぺしやんこ「に」だと思うが、これからスタートするよ、というユキノシタの強さを思うと、ぺしやんこ「で」しかなかったのだと思う。最後の口語体がこの歌ではうまく効いている。

★同じような感想を述べると、代表の泉さんから「違う意見を言ってください」とすかさず教育的指導が入る。「皆さん、結構遠慮なく言いたいことを言うのだから」という感想を持っていただけに、かりん主宰の馬場さんが常々仰っているという「個性を出し、人と違うところを詠む」という、その教えが浸透していることがわかる。「自分では気づかないところを教えてくださいからありがたい」と会の方も仰っていたが、率直に胸襟を開いた分だけ学びも深まる、ということはこの歌会から教えていただいた。(木戸敦子)



▲「もう少し近くに寄ってください」の言葉にスクラムを組む皆さま
前列右から2人目が会を創設した島津エミさん

谷知由紀子様 『句集 新しく』

(神奈川県・大和市)

4月4日、昨年9月に喜寿の記念として『句集 新しく』を上梓された谷知由紀子さんにお話をお聞きしました。

Q 俳句との出会いから

子育て中の頃、感受性が強かったこともあり、文字で何かを表現したかった。なぜか虚子の「流れゆく大根の葉の早さかな」という句が心に残っていて、ならば俳句だ!と思い、当時住んでいた社宅の近くにできた丸井カルチャー教室の門を叩いた。右も左もわからない状態だったから、会のおばあさまたちが親切に教えてくださった。まずはやってみよう!と、無謀にも日経新聞や東京新聞に投句を始め、飯田龍太、中村汀女、山口誓子といった方々の選を得ることも。雲の上の人が私の句をわかってくれた、その格別な喜びが支えとなり、今も俳句を続けているのだと思う。



▲何ごともまずはやってみないと! という体験派の谷知由紀子さん

鶏頭へふいに揚羽の出て来たる
手紙書くものみな寒く見ゆる日に
ライトバン停めて一家の袋掛け

Q それからは俳句一途で?

いえいえ、それ以後は結社に所属したものの、締切があるから何とか詠んできた程度。ただ「読む」と「詠む」の両輪を意識して続けた。でも、まずは主婦としての生活、日常が大切で、それを犠牲にしたら失格だと思っていたので、日常の生活の中でできるものとして俳句が合っていた。

横ざまに草へ自転車夏来る

日常で気になったり、あつ、草の上に自転車寝かせてあるな、ということとをメモにして、あとで辞書をひいたりしながら句を作る。今回の句集は、この辺で整理しないと、という身辺整理の意味と、体力的にもギリギリだと判断し区切りをつけた。プロの方は句集を作品として発表し世に問うが、これは私の精一杯の自分史。

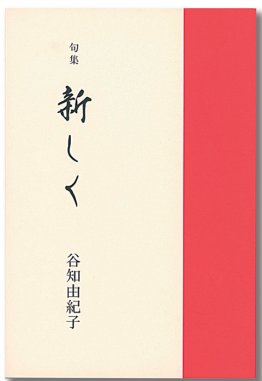
嫁ぐ子に砥石持たせん柿若葉

夫入院

病者らに今宵花火の窓のあり
父が出て母にすすむる柚子湯かな

Q 満足のいく句集に?

8月生まれなので、夏がスタートの句集としたが、まとめてみたら不思議と夏の句が一番多かった。最初、御社で夏の句なら三夏(初夏・仲夏・晩夏)と分けてくださったことが、まとめる際に非常に助かった。



▲佳き空気感の満ちた『句集 新しく』

ただ、改めて一冊の作品として見ると、あと20句程減らして320句位にすればよかったかな、とも。「小児科に葉播る音熱帯魚」とか、どうしても古くなってしまいう句がある。句集の場合、古くならない句の見極めが大切だと思った。

新しくパンのお店や日日草

今回の句集名はこの句からとった。飯田龍太の句で「どの子にも涼しく風の吹く日かな」という、とてもわかりやすい句がある。ちょうど開店するパン屋さんの前を通り、自然と出た句。最後「新しき」とするべきか迷ったが、これでよかったと思っている。ありがたいことに皆さん深読みしてくださるのですが、常に新しくありたいとか、そういう高尚なことでは全くないの、たまたま通っただけ(笑)。

短冊の贖物かとも古茶噺る

さつきからこち見てゐるサンダラス
煙出てきさうになりて日向ぼこ

Q これからも俳句を生活の中心に?

俳句は自分を慰めてくれるものではないが、この句集をまとめたことでこれから優先順位を1.日常、2.瞑想

(ヴィパッサナー瞑想)、3.俳句としたい。ヨガや瞑想は若いとき、体調が優れないと怒りっぽくなったりする、そんな自分がいやで始めた。気持ちが落ち着き、すっきりする。20年位前、まだ夫が健在の時に、より自分のことを知りたいと思い10日間の瞑想合宿に入った。そうしたら「自分はなんて悪い人間なんだ」ということを思い知らされて、お腹に力が入らなくなった。それを夫に告げると「そんなこと、最初からわかってた」って言うのよ(笑)。でも、行法の一つの慈悲の瞑想では、まず自分。自分が幸せにならないと余裕は生まれなから、周りの人も幸せにできない。あとは死ぬだけ、その日まで俳句をつくりながら、自分と人への理解を深めていきたい。

★生まれは今の新宿伊勢丹の辺りというチャキチャキの江戸っ子の谷知さんは行動する人。好奇心旺盛で、ご自身で見えて聞いて納得しないと先へ進めない。今回の句集の件でも、10年前の「お宅で句集を作ります」という約束を守り、昨年「じゃあ〇日に新潟にかがいます」と連絡があり、社内ではデザインや紙をいくつか見たりしながら「じゃあこれにします」と、ぱぱと決め帰っていかれた。はつきりとした意思をお持ちで、一緒にいると実に清々しい気持ちになる方だ。

(木戸敦子)

※『句集 新しく』をご希望の方は弊社までご連絡ください。著者より3名の方に進呈致します。

投稿作品

短歌

1 都市対抗野球で踊る炭坑節日鉄二
瀬ふと唄びをり
濱田イサオ(福岡県)

2 色々な役職おへて断捨離と分つて
いるのにまた春着買ふ
高須 孝(愛知県)

3 歴史書を仰ぎて探す本棚の高さに
吾れの小さくなりてし
中田妙子(東京都)

4 何事も満点などあり得なき今を感
謝しプラスに生きなん
渡部美代子(山形県)

5 オロロンの本届くまで首長し白寿
間近の三浦の兄より
早坂絃司(北海道)

6 子が遊びまた孫遊ぶ公園の古いブラ
ンコ早春の風 北澤実夫(東京都)

7 喜怒哀楽多くの事にあつたけど終
着駅に近付きて今一度見たい若き
日の夢を 近藤 毅(岡山県)

8 赤土の養分吸いとり肥え太る新
じゃが芋がドツサリ届く
濱崎祥子(鹿児島県)

9 川と海にはさまれている本町とこ
どものころは思はざりけり
安部 哲(新潟県)

10 正造の御霊弔ふ鐘の音が渡良瀬河
畔の古寺より響く
山田良男(埼玉県)

11 八月のあの日あの時火に溶けし友
は被爆地の一草の根
寒川靖子(香川県)

12 主無きに五十六年変りなく新婚旅行
思い出押葉 本田智恵子(東京都)

13 冬の間の朝寝の癖がとれなくて四
月も中葉寝坊助農婦
田中豊恵(新潟県)

14 父の日に再び触れることは無し死
して二十日目満開の梅
桑原謙一(群馬県)

15 雨粒に愛されし花紫陽花よ心奪わ
れ雨に咲く花 大橋絵代(千葉県)

16 諺の美人薄命うそと知る紅を忘れず
母は百才 大久保アヤ子(東京都)

17 心より晴れぬニュース報道に今日
一日の無事を祈りて
高橋登志子(新潟県)

18 ホームより帰りし妻の仏壇に花水さ
して熟睡の春 坂元正憲(東京都)

19 明けきらぬ空を震わす初ひばり仰
ぎて和さん春のときめき
島田實貴男(群馬県)

20 水の上に枝を差し伸べ嬬やかな千
鳥ヶ淵の桜煌めく
関原幸子(東京都)

21 老いてなお凜と生きよと語るごと
猫の孤独に不思議な力
合田浩子(茨城県)

22 春うらら花に寄り添ひひらひらと
無心に遊ぶ蝶羨まし
久本にい地(岡山県)

23 痛い痛い序章にてみな駆ける春
の舞台はうす明かりの中
土屋喜雄(山梨県)

24 さくらんぼ紅色淡く咲く花は貴方
に添うかに実がつらなりて
大鳥居牧子(東京都)

25 基本には外れた字を書く父なれど
とめ・はね・はらいに迷いは見えず
竹田満美子(静岡県)

26 夫逝きて三十年の春巡り来ぬ守ら
れし身の幸せの今
峯岸信子(東京都)

27 満天星の花風に揺れ奏でをり音無
き音の優しき調べ
早坂保文(宮城県)

28 汚染元水と空気のバランスか生命
育む輪廻解けるや
菅井文男(新潟県)

29 憂きことの多きこの世にひととき
の癒し求めて藤の花愛づ
岩崎令子(大阪府)

30 早朝にはるかに見える那須岳雪崩
があつて若者が逝く
新井 賢(埼玉県)

31 日光や男体山の麗わしさいろは坂
より家康しのお
五味田幸夫(東京都)

32 家にある東芝製が泣いている
原 崇雄(埼玉県)

33 歳かさね心豊かに過したい
久保寿雄(北海道)

34 箸が転んだら男も笑おうよ
丸山芳夫(東京都)

35 つまみ食いだから美味しく感じるの
細川光子(栃木県)

36 やわらかい棘に刺されて金婚譜
木村洋一(新潟県)

37 婚活に夢中になって八十路坂
松田重信(埼玉県)

38 候補者に黒い手袋似合う人
橋本世紀男(東京都)

39 付度・付度春の国会喧しき
井原毬子(東京都)

40 新緑へ癒やされにゆくスニーカー
小山恵美子(大阪府)

41 大胆な手口を真似て妻にばれ
関本 守(新潟県)

42 下がるまで何度かはかる血圧計
山口静一(東京都)

43 奥さんと言われ母さんと代ります
石原 岳(群馬県)

44 生かされて私にや大事なもの今
阿部澄江(宮城県)

45 努力せず薬と医者に頼る人
守屋高雄(岩手県)

46 年老いて妻の仕草が母に似る
長谷川庄二郎(千葉県)

47 再会を誓い別れる春彼岸
鈴木義雄(福島県)

48 今度又いつの日逢える真央ちゃんに
佐伯セツ子(香川県)

49 耳にせみ目飛蚊症老いていく
岩崎政弘(岡山県)

50 川の字が二の字に変わる朝三時
山崎一嘉(愛媛県)

51 眠る山へたなホケキョについ笑い
奥那於子(大阪府)

52 以下同文受けた賞状重みな
山口千鶴子(東京都)

53 咲き誇る野草を避けて散歩道
木村誠一(神奈川県)

54 自主避難好きでやってくる人はない
和崎治人(山口県)

55 国産にこだわり財布軽くなり
宇都木安子(東京都)

56 助手席に助手などしない妻が乗る
目黒豊光(福島県)

57 フクシマを漢字に戻す重い義務
小石澤英夫(東京都)

58 選挙戦老いも若きもチルドレン
嶋田征次(東京都)

59 廻廊に佇みて万葉の風
小林榮子(埼玉県)

俳句

- 60 出番早し赤いべべ着て竹の子や
油谷博子(兵庫県)
- 61 仕草まで母に似てくる妻となり
鈴木蝶次(宮城県)
- 62 赤い糸切れずに五十年早や八十路
中村和弘(愛知県)
- 63 風船の宙に届かず夜又笑ふ
緑川禎男(埼玉県)
- 64 咲き満ちし桜の下のくらすかな
松嶋光秋(東京都)
- 65 慟哭の日より六年春彼岸
坪田勝秀(鹿児島県)
- 66 連翹や玉子解く音母の音
吉里ひとみ(東京都)
- 67 花月夜感嘆符抱きねむりけり
二瓶邦枝(埼玉県)
- 68 五月階段教室物理学
津田忠彦(岡山県)
- 69 いまさらの親孝行をさくら時
小島岳青(新潟県)
- 70 春愁や柄杓に重き神の水
上村元義(神奈川県)
- 71 度忘れと何気なく言ふ木瓜の花
堅田秀子(東京都)
- 72 メーデーや若き写真の菓子箱に
白川 博(新潟県)
- 73 白木蓮角の屋敷に若夫婦
竹本芙美子(新潟県)
- 74 声出して読む新聞や冬ごもり
宮宅芳子(岡山県)
- 75 うぐひすの谷渡り聞く河内郡
嶋田きよ子(奈良県)
- 76 春灯やまだ捨て切れぬ心襷
浦橋渴雪(兵庫県)
- 77 鎌を研ぐ卒寿の義姉に花菜風
中嶋清子(佐賀県)
- 78 牡丹雪女湯よりの笑ふ声
平山千江(岩手県)
- 79 格子戸の父母の家梅香る
若月理依子(新潟県)
- 80 こゑ光り春をくだりて湖に立つ
佐々木素風(新潟県)
- 81 気負いなく咲きて見頃の遅桜
高崎登喜子(東京都)
- 82 恋しらず石の如くに濡れ桜
松尾らん(東京都)
- 83 名を呼ばれ大きな声で入学す
道給一恵(埼玉県)
- 84 稀勢と真央 涙と笑顔 時は春
阿部 至(埼玉県)
- 85 退院の友を祝ぎけり百千鳥
天野輝子(東京都)
- 86 ビオトープ我が物顔の暮の蝌蚪
富樫和子(山形県)
- 87 復興の二文字七年へ蝮の道
有坂馨園(福島県)
- 88 陽に映えて生氣与へし柿若葉
西條公雄(埼玉県)
- 89 一刀に断てぬ煩惱臘月
川口 襄(埼玉県)
- 90 掌の皺は生きたる証花茨
檜山とり子(東京都)
- 91 皓齒見せ退き際語るさくらかな
大谷 茂(埼玉県)
- 92 豆飯の塩梅のよき母は亡く
近藤薫也(千葉県)
- 93 天と地をせましと桜吹雪かな
阿部徳夫(宮城県)
- 94 百トンのデブリそのままの春
黒澤正行(福島県)
- 95 春場所や稀勢の里の快拳に酔ひ痴
れる
日名子春実(群馬県)
- 96 幼児のちよこんと座る犬ふぐり
中島光江(埼玉県)
- 97 老兄の口笛止めるドナウ下り
白松いちろう(千葉県)
- 98 独り子の声変りして進級す
大阿久雅子(埼玉県)
- 99 子どもの日貧困差別堪へがたし
福岡 悟(東京都)
- 100 草むしり勤勞奉仕のありにけり
三津木俊幸(千葉県)
- 101 大仏は美男に御座す花の雨
佐野和彦(静岡県)
- 102 顔触れの一人足りない花の宴
佐野 繁(静岡県)
- 103 亀鳴くやレットイトビーなるわが
余生
関山恵一(神奈川県)
- 104 回り道すこし偽る臘月
小澤円梨(静岡県)
- 105 噴き出でて幹の瘤より花咲けり
津布久信雄(東京都)
- 106 四葩咲く手話のふたりの笑顔かな
村田吉雄(東京都)
- 107 胸張って少し無理して青き踏む
井上静夫(栃木県)
- 108 通天閣わが土性骨桜咲く
居原田連星(大阪府)
- 109 風光るお宮参りの嬰かこみ
堀木和子(大阪府)
- 110 園児らの帽子三色チューリップ
小林七重(新潟県)
- 111 木下閣産毛をまとい顔を出す
阿部幸子(宮城県)
- 112 平成といふ末年の日永かな
岩村 昇(神奈川県)
- 113 鳴け鳴けと亀をはやせるネズミ達
白戸麻奈(東京都)
- 114 書痴といふ病の抜けず葱坊主
湯浅芳郎(岡山県)
- 115 かたまりて咲いても一人静なる
今井勝子(新潟県)
- 116 久闊を叙してまずはと柏餅
渡邊 清(宮城県)
- 117 里山の見渡す限り緑さす
川嶋法子(東京都)
- 118 万愚節遅れたままの花時計
古谷 力(東京都)
- 119 光陰の余白に綴る四葩髓
内河邦久(東京都)
- 120 ほのかなる朝のとときめきチューリップ
片山茂子(埼玉県)
- 121 音のして四月の天地動き出す
重原 昇(新潟県)
- 122 北海道の雪解や大地に水走り
梶 鴻風(北海道)
- 123 相槌を打つ孫と住む春炬燵
清まさし(静岡県)
- 124 病む人の杖と同行桜見る
神 一男(静岡県)
- 125 人生の悲劇喜劇の村芝居
山崎吉晴(群馬県)
- 126 春迎え背伸びしている山の木々
水落重武(新潟県)
- 127 皮を脱ぎ竹の若葉の生氣かな
松前邦広(千葉県)
- 128 妻の愚痴聞きつつ空る春の昼
長峰正晴(千葉県)
- 129 いさぎよき足下を汚す花吹雪
古川正栄(千葉県)
- 130 爪の様新芽色づく柿の春
五十嵐陸博(新潟県)
- 131 姫垣の奥より香る沈丁花
杉原明子(静岡県)
- 132 百千鳥明るい朝は虚ろなり
岩田 信(神奈川県)
- 133 姥棄ての月と伝説粉を播く
青木日出男(群馬県)
- 134 遅風呂の滋雨に芽吹き音しきり
菅原キイ子(宮城県)

- 135 学童の声登り来る角田山
磯部 力(新潟県)
- 136 下萌えに明日の力や夢あらた
木村 舂(山形県)
- 137 花冷えや影移ろひぬ寺の庭
石尾曠師朗(東京都)
- 138 花の雨散り急ぎ足子息逝く
塩崎須美子(神奈川県)
- 139 放哉のゆかりの小径花曇
田中 昶(鳥取県)
- 140 さへづりの眩しき中の齢かな
青木ケン子(埼玉県)
- 141 幸せは中の中かな花曇
大橋恒次(新潟県)
- 142 スクラムを組みし日もありつくしん
山崎鶴恵(鹿児島県)
- 143 つちふるや引揚げの駅母の里
中村康浩(福岡県)
- 144 浜離宮恩賜庭園夏木立
本庄準也(埼玉県)
- 145 老鶯の遠く近くに露天風呂
佐藤儀雄(北海道)
- 146 黄水仙無我の境地の大逆転
井田由利子(宮城県)
- 147 摘み草に親子で夢中風そよと
中田文子(大阪府)
- 148 床の間に飾りて美しきランドセル
井上氣海(広島県)
- 149 下校子のホップステップ花吹雪
一瀬正子(埼玉県)
- 150 薫風に消せぬ面影ばかりかな
堀田寿美子(北海道)
- 151 ジョギングの今朝は菜の花色のシヤツ
大塚徳子(埼玉県)
- 152 花びらをすくってはまく学童っ子
星 一子(神奈川県)
- 153 人は皆惜しみ惜しまれ散る桜
吉村充治(埼玉県)
- 154 園児打つかスタのソソソ土筆出る
寺内 侖(埼玉県)
- 155 砂利の道踏まれながらに黄たんぽぽ
杉村美保子(岩手県)
- 156 賑やかなドッグ・エリアや桜散る
倉田淑子(東京都)
- 157 背の曲り忘るるほどの桜かな
藤井春三(埼玉県)
- 158 コーヒーの味は変らず麦の秋
宇田川正雄(埼玉県)
- 159 特攻の兵の遺文や花の雨
鮫島茂利(兵庫県)
- 160 よすがと言うかたちも愛し花蕊かな
池田 岬(埼玉県)
- 161 穀雨かな鍬一打ちの太き影
黒岩正子(埼玉県)
- 162 小流れに春の音聴く試歩の道
柴田恵美子(北海道)
- 163 流しひなホテルのロビーにぎやかに
白木和子(東京都)
- 164 老いてなほ春眠と云う若さあり
鏡たか子(山形県)
- 165 若布寄る戦時の母は若かりき
中山日出子(大阪府)
- 166 花嫁の子らに送らる麦の秋
齊藤安弘(神奈川県)
- 167 ゆるやかに水の流れや花筏
田中恵美子(山形県)
- 168 母の日や遠き記憶の童唄
村山徳英(埼玉県)
- 169 春田の2の字の首の昼御膳
高橋エミ(山形県)
- 170 一礼し交差路渡る新入児
金子範子(高知県)
- 171 診察の嬰の大泣き穀雨かな
浅野信廣(宮城県)
- 172 潔く舞い散る桜愛おしく
岡村君枝(茨城県)
- 173 伸びをして猫どこへ行く小春風
本間ミネ(新潟県)
- 174 句談義の声乗りてゆく若葉風
本間 進(新潟県)
- 175 街角で君との出会ひ花の昼
小林春雪(新潟県)
- 176 木々芽ぶき空に幸せあるように
菅原茂子(宮城県)
- 177 百年の家系を守り柿若葉
田野井一夫(栃木県)
- 178 立ちつくすホルスタインに虻の音
佐藤 信(神奈川県)
- 179 悴みし手に葬送の香を焚く
野木宗信(奈良県)
- 180 いくたびも羽化して余生さくら狩り
中岡昌太(神奈川県)
- 181 神の守仏の守やねぎ坊主
中川義彦(新潟県)
- 182 シクラメン春の日ざしのやわらかさ
湯浅暉子(石川県)
- 183 福寿草かつての兄も今は老後
菊池東一(北海道)
- 184 葉桜の風に送られれ子と同居
大窪美代子(大阪府)
- 185 五月晴れ早朝清んだホーホケキョ
長谷部喜代子(大阪府)
- 186 呼び止められ庭の牡丹をもらひけり
光成高志(千葉県)
- 187 磯の香を嬸と分かっ石尊探り
山田富朗(埼玉県)
- 188 卒業式初恋なりしあの疼き
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 189 亀の首長きを競ひ夏に入る
椋本望生(大阪府)
- 190 恋すてふボディソープで髪洗ふ
橋爪真由美(新潟県)
- 191 母の日の母の慟哭シリアかな
清水君江(埼玉県)

フォトイック

- 192 植田行く農の祖先の血の目覚め
安田芳江(茨城県)
- 193 役人に付度ありし飛花落花
中野勝子(鹿児島県)
- 194 てのひらに乗って登校かたつむり
高垣勝代(大阪府)
- 195 花みかん丘より見える小舟かな
平林義康(兵庫県)
- 196 こふのとりに育む但馬田水張る
石井一枝(埼玉県)
- 197 クローバーの四つ葉に出逢ふ妻のこゑ
邑橋節夫(兵庫県)
- 198 自らにごほうび一輪カーネーション
沖 惇子(大阪府)
- 199 俺の生き方君の一生似たような
大場岬月(長野県)
- 200 たけの子よ太く大きくなるんだぞ
二瓶邦枝(埼玉県)
- 201 筍は囊中錐か隠徳か
津田忠彦(岡山県)
- 202 陽のさして筍育つまた明日
堅田秀子(東京都)
- 203 忘れらる筍威し天突けむ
千代田俳徒(東京都)
- 204 竹の秋洩るる日の中かぐや姫
平山千江(岩手県)

こちらの写真を見て詠んでいただきました。



(写真提供：中川 肇さん)

- 205 此処だけにある風の音竹の秋
高崎登喜子(東京都)
- 206 竹林の孤独宙にかけた思い
松田重信(埼玉県)
- 207 わたし今かくや姫をば育ててる
橋本世紀男(東京都)
- 208 若竹の漲る力われも欲し
天野輝子(東京都)
- 209 さがしてる土の割れ目を竹の子掘り
井原毬子(東京都)
- 210 孫の背の孟宗筍や父逝きぬ
富樫和子(山形県)
- 211 やさしい子ここにあるよと声のする
小山恵美子(大阪府)
- 212 名人は土の気配で鋏を入れ
石原 岳(群馬県)
- 213 竹の子や早く世に出よかくや姫
近藤薫也(千葉県)
- 214 「がんばるぞ」いつかみていろほく
だつて 阿部徳夫(宮城県)
- 215 「こんにちは」今年も皆様「よろし
くね」 阿部澄江(宮城県)
- 216 竹の子の三日見ぬ間の伸び盛り
大阿久雅子(埼玉県)
- 217 スポットを浴びて誕生するスター
長谷川庄二郎(千葉県)
- 218 生れてびつくりたかな吾に親の脛
鈴木岑夫(千葉県)
- 219 かくや姫宿るか里の今年竹
三津木俊幸(千葉県)
- 220 日溜りに一番乗りや春筍
佐野和彦(静岡県)
- 221 たかなや木洩れ日拾ふ朝の闇
小澤円梨(静岡県)
- 222 万葉の小道孟宗竹の示威
居原田連星(大阪府)
- 223 朝掘りの重き筍持ちくれし
堀木和子(大阪府)
- 224 竹林に竹の子一つなせ残る
鈴木義雄(福島県)
- 225 かくや姫みごと生れる大社
阿部幸子(宮城県)
- 226 庶民には筍医者も医者のうち
岩村 昇(神奈川県)
- 227 かくや姫取れるものなら通つて見よ
佐伯セツ子(香川県)
- 228 出おくれの筍に陽の思い遣り
片山茂子(埼玉県)
- 229 竹取の翁来たりて筍掘り
梶 鴻風(北海道)
- 230 サンダーバード何号だつたか地中から
安部 哲(新潟県)
- 231 筍のライトに踊る晴舞台
神 一男(静岡県)
- 232 孟宗の筍赤くよく育て
水落重式(新潟県)
- 233 よろしくと孟宗竹にご挨拶
山田楽山(埼玉県)
- 234 暗闇に竹の子生まれ輝けり
松前邦広(千葉県)
- 235 竹の子はスポット浴びて背伸びする
長峰正晴(千葉県)
- 236 土に生れ明日の日本の節となれ
五十嵐睦博(新潟県)
- 237 大人数注目の的は俺だった
濱崎祥子(鹿児島県)
- 238 竹の子や背筋のばしてむかれけり
青木日出男(群馬県)
- 239 掘るでない立派な親になってやる
田中豊恵(新潟県)
- 240 たけのこがいつの間にかやら青竹に
岩崎政弘(岡山県)
- 241 竹林に新たな命生れにけり
萬濃その子(神奈川県)
- 242 スポットあび十二単衣のかぐや姫
奥那於子(大阪府)
- 243 宇宙へと気魄満ちたる今年竹
本庄準也(埼玉県)
- 244 遠足の去りし静寂や日だまりに
佐藤儀雄(北海道)
- 245 春耕や野良着の夫は退職す
井田由利子(宮城県)
- 246 ホコ天の竹の子族が懐かしい
和崎治人(山口県)
- 247 竹の子や未来の不安かくせずに
北野耕兵(千葉県)
- 248 若竹の伸びる姿が楽しいな
高橋登志子(新潟県)
- 249 若竹は青竹なるかたけのこか
宇都木安子(東京都)
- 250 初孫に曾父母そろひて喜びぬ
寺内 侖(埼玉県)
- 251 見守られ竹林の子はすくすくと
小林恵子(大阪府)
- 252 成長の芽は明らかに一年生
有田裕子(北海道)
- 253 みだれ季に方向迷う今年竹
藤井春三(埼玉県)
- 254 九月には翁となりて竹刈らん
島田實貴男(群馬県)
- 255 ここは何処ですか迷い筍
池田 岬(埼玉県)
- 256 隣国のロケット思ふ竹の秋
黒岩正子(埼玉県)
- 257 朝掘りの竹の子ご飯母の味
関原幸子(東京都)
- 258 つきぬけて光の中に孟宗竹
合田浩子(茨城県)
- 259 木洩れ陽の古里を恋うかくや姫
小林榮子(埼玉県)
- 260 今に見て青く立派な竹になる
鏡たか子(山形県)
- 261 かくや姫生まれよじめ無き世待つ
久本にい地(岡山県)
- 262 あ、あ、伸びすぎちゃった!
浅海和代(東京都)
- 263 たけのこや筍に浮かれし小人たち
齊藤安弘(神奈川県)
- 264 木洩れ日の温もり筍伸び過ぎて
村山徳英(埼玉県)
- 265 過疎の村赤子が生れ濃き五月
中岡昌太(神奈川県)
- 266 風を呼ぶ闇の竹の子つむじ曲げ
椋本望生(大阪府)
- 267 早来いと糠風呂の待つ筍かな
清水君江(埼玉県)
- 268 まか不思議昨日は見えぬ孟宗竹
柳澤京子(宮城県)
- 269 もしかして平成の姫生るるやも
杉浦俊雄(静岡県)
- 270 耐え生きよ末は見事な家飾る
菅井文男(新潟県)
- 270 竹林の木洩れ日の中清和かな
中野勝子(鹿児島県)
- 270 木洩れ日に産まれし生命いとおしむ
岩崎令子(大阪府)
- 270 同窓会今年も元気で会いましょう
山中たい子(大阪府)

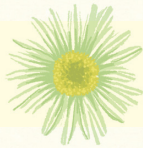


俳句・川柳募集!!

(写真提供：中川三郎さん)

右の写真から、自由にイメージし五七五(俳句か川柳)で表現してください。応募はアンケートハガキ投稿欄にて。お待ちしております!

4-5月号の 心に残った作品



「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんの回答をお寄せ頂きありがとうございました！その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。
※大賞と自句自解コーナーは年1回です。

◎川柳部門大賞

5 トランプのババを引くのは誰だろう
橋本世紀男(東京都)

・トランプは川柳を作るのに絶好の題材です。細川光子(栃木県)・まさに風刺、ババ抜きは始まったばかり、引くのは日本ではないのを願ってます。小山惠美子(大阪府)・もしかしたら日本かも。濱田イサオ(福岡県)

21 「加齢です」それならできるにわか
医者 和崎治人(山口県)

・「ヒザ」が痛い。耳の聴こえが悪い。みんな「加齢」です、ですまされた濱崎祥子(鹿児島県)・加齢ですならよい方です。すけすけと老化だという薙の医者 石原 岳(群馬県)・私も時々同じ手を使います。本当に便利ですね 井上氣海(広島県)

◎俳句部門大賞

35 老いるとは生きることや草萌ゆる
大谷 茂(埼玉県)

・元気で人生を謳歌している人を見るとまさにこの句のとおりと思う 長峰正晴(千葉県)・自分も齢を重ねまだ句作の出来る昨今ですが大谷様の句に心引かれました。生かされ生きること感謝です 道給一恵(埼玉県)・生きてゆくことに対して草萌ゆるの季語がしっかりきいてると思えました 片山茂子(埼玉県)・同世代の一人として実感があります 山崎吉晴(群馬県)・淋しく老ゆる事なく「草萌ゆる」が余生を明るくしてくれます 日名子春実(群馬県)・老いても老いても元気で長生きしたいものです 水落重武(新潟県)・老いることができるのは、生き

ているからである。「草萌ゆる」の配合もよい 佐野和彦(静岡県)
55 ぐいぐいと夢の一字風あがる
阿部澄江(宮城県)

・「ぐいぐい」に勢いと手心を感じる。夢を乗せてきつと叶いそう 石井一枝(埼玉県)・「夢」の大風が天空を舞う情景が目には浮んできます 大谷 茂(埼玉県)・のどかな大空の広がりに平和である幸せを感じます 川嶋法子(東京都)・近くの山に息子の車で行った際、手造り風を揚げていた方がいた 柳澤京子(宮城県)・五月の草原が校庭で子どもらが風を揚げています。上五に勢いがあり、彼らの「夢」の前途を励ましているようだ 浅野信廣(宮城県)・夢をのせた風がぐいぐいと勇ましく目に浮かび来る。その所が共鳴できます 堀田寿美子(北海道)

◎短歌部門大賞

194 宇宙より眺むる地球はひとつなり
何故に争う民と民とが
野木宗信(奈良県)

・ミレーの絵をみるおもい。福島は三月十一日の景か。座五が重く読者に迫る 小島岳青(新潟県)・震災か終戦の記念日でしょう。誠実なご夫婦の手柄がしのべれます 宮宅芳子(岡山県)・震災で犠牲になられた方への共感を呼ぶ 古川正栄(千葉県)・地震、津波、原発から逃れ、今帰村し夫婦で田畑を耕しこの地に骨を埋めようとして没した隣人を拝む心かなしい 菅井文男(新潟県) 他

・「国広く民多かれど民を飢えさせ哀しませる政のリーダーたちなり」です 齊藤安弘(神奈川県)・宇宙船地球号の中で人と人、民族と民族が争い奪いあうことのむなしさ 桑原謙一(群馬県)・苦しむのはいつも庶民 久本に地(岡山県)・全世界の人々にこの短歌を読んでもらいたいと思います 高橋忠雄(東京都)・地球上の醜い争いを視点を変えて訴えている。発想の転換がよい 山田良男(埼玉県)・天災より人災におどろおどろの最近です 合田浩子(茨城県) 他

203 野の花も花屋の花も皆同じ力の限り今を生き継ぐ
渡部美代子(山形県)

・雑草もチューリップも同じように生きる力をもつ。その可愛い心穏かな視点に触れました 坂元正憲(東京都)・人も花も同じく今を一生懸命に生きる姿を見るようで 近藤真知子(岡山県) 他

◎フォトイック



※今回、大賞はありませんでした。

◎四次元へお誘い申す謎の窓

204 松田重信(埼玉県)
・さすがです。次元が違います 有田裕子(北海道)・四次元の界までイメー

ジをふくらませ背景の大きさに感動 小林榮子(埼玉県)
260 それぞれの風待つところ春の空
有島和子(東京都)

・それぞれの働きぶりをよみとれました 北野耕兵(千葉県)・回りたくない時もあるのです 杉浦俊雄(静岡県)

◎他にも
6 医師の言うそれも加齢にムツとする
原 崇雄(埼玉県)

27 孫の供お子様ランチお猪口付き
近藤富夫(東京都)
40 シクラメン待ち合ひのこむ歯科医院
竹本美美子(新潟県)
63 花よりも実を愛でし紫式部
西條公雄(埼玉県)

80 滔々と千曲川は在りぬ花林檎
鈴木清子(埼玉県)
88 春一番はじき合ひたる絵馬の列
田中 昶(鳥取県)

102 職場での序列生きてる花見の座
長峰正晴(千葉県)
114 春風や手作りパンの販売車
一瀬雅子(埼玉県)

126 折鶴をそへて懐紙の桜餅
宮崎敏昭(埼玉県)
162 春の夜の消えぬ灯りや夫婦酒
仁藤ひろじ(埼玉県)

176 色紙の舟にいただく雛あられ
本庄準也(埼玉県)
188 魅せられしむらさきラピスのイヤリング鏡に写す喜寿のほほえみ
峯岸信子(東京都)
※今後もふるってご投稿をお願いいたします！

Q 前回のアンケート
一番「夏だなあ！」と
思う瞬間はどんなとき
ですか？



★すいか

・ 熟れ冷やした西瓜にかぶりつくとき

石尾曠師朗(東京都)
大きなスイカが店頭に並んでいた時
塩崎須美子(神奈川県)
スイカが無性に食べたくなるとき
竹田満美子(静岡県)他

★かき氷

・ 昔父と店の「よしず」の中で食べたことをなつかしく思い出して食べます
石原 岳(群馬県)
氷削り器を戸棚から出し、冷蔵庫の水をポンとはめこみ、ガリガリシャリシャリ削る午後
鈴木岑夫(千葉県)
「かき氷はじめました」のお知らせが店先に出始めたとき
井田由利子(宮城県)
夏山のとっぺんで手製のカキゴオリを口に入れたとき
北野耕兵(千葉県)他

★ビール

・ ビールの欲しい時
津布久信雄(東京都)
・ 生ビールをぐぐつと飲みほしたとき
岩村 昇(神奈川県)
・ 風呂あがりゴクリと飲みしビールかな
稲葉民雄(千葉県)
・ 生ビールで乾杯する時
土屋喜雄(山梨県)他

★汗

・ 風もなく汗だくになっている昼下がりに
細川光子(栃木県)
・ 顔に汗がでたとき
宇田川正雄(埼玉県)

・ 草とりをして全身汗をかきシャワーを浴びた時
黒岩正子(埼玉県)
・ とめどなく吹き出す汗をぬぐう時
早坂保文(宮城県)他

★花

・ 水芙蓉が畦道にズラーと咲いている時
松尾らん(東京都)
・ 「爽竹桃」の紅い花を見る時
三津木俊幸(千葉県)

・ 美しく朝顔が咲いているのを見た時
本田智恵子(東京都)
・ 北海道の場合少々の雪が消え、桜、梅、リンゴ、チューリップ、つつじなど一気に花が咲きだすと春ではなく夏を感じます
梶 鴻風(北海道)
・ 梅が終わり、桜が咲き、海棠の花が赤く色づいたとき
水落重式(新潟県)

・ 鉢植えの無花果が実をつけ始め老爺柿の青い実が光り出す
木村誠一(神奈川県)
・ 炎暑の中、負けずに燃える百日紅に出会ったとき
目黒豊光(福島県)他

★海・波

・ 海開き
阿部澄江(宮城県)
・ 海水浴へ出掛けるのが我が家の行事の一つではじける笑顔の子供を前にしたとき夏を実感
堀田寿美子(北海道)

・ 裏は浜、日々さらさらと次第に照りと輝きを増し、釣り人も増してきま
高須 孝(愛知県)

・ 梅雨明け後の「海の日」
橋本世紀男(東京都)

・ 埋め立てで遠くなった海から夕風に
乗って汐のかおりが運ばれて来る時
堀木和子(大阪府)他

★風

・ 暑い中にさわやかな風が吹くとき
松田重信(埼玉県)
・ 青葉風
有坂馨園(福島県)

・ 耕土一面早生苗田をなでるように吹く青田風の頃
菅原茂子(宮城県)
・ 空の青さと白い雲、汗ばんだ身体にうける涼風
岩崎令子(大阪府)

★風鈴

・ 風鈴を吊るしたりよしずを出す時
小林榮子(埼玉県)

・ 濡縁の南部風鈴がたまに鳴るとき
村山徳英(埼玉県)

★人道雲

・ あのムクムク感が夏だ！
濱崎祥子(鹿児島県)
・ 青空へもくもくと湧き上る人道雲
青木日出男(群馬県)



・ 子どもの頃田舎の土手で友と寝ころんで見た人道雲は圧巻でした
寺内 佶(埼玉県)

・ ビーンと燦然と輝いているあの雲が出たら夏だ夏だ夏だ
有島和子(東京都)他

★太陽・夕日

・ 朝一番窓から入って来る風と太陽のひかり
堅田秀子(東京都)

・ 真昼の太陽が真上にあつてジリジリと脳天を焼く時
井上静夫(栃木県)
・ 夏の夕方、日本海の水平線に沈みゆく夕陽の輝きを見る時
若月理依子(新潟県)

・ 太陽の熱をちりつと肌感じた時
星 一子(神奈川県)他

★気温

・ 気温三十度こえた時
鈴木義雄(福島県)

・ 朝から猛烈な日の光と25℃を超えた気温の時
齊藤安弘(神奈川県)他

★空

・ 青空に白い雲、さわやかな風「あ、初夏になった！」と感じます
井原毬子(東京都)

・ 雲一つない空から太陽がギラギラ照りつける時
金子範子(高知県)他

★陰

・ 片蔭を出る勇気がなくなる時
松嶋光秋(東京都)

・ 電柱の陰さえほしくなる時
椋本望生(大阪府)
・ 電柱の影に涼しさを感じた
高垣勝代(大阪府)

・ 木陰が本当に涼しいなと感じた時
仁藤ひろじ(埼玉県)

★山

・ 富士山の麓に住んでいますからやはり雪解富士ですね
神 一男(静岡県)

・ 山が緑になったとき
橋爪真由美(新潟県)
・ 山清水を両手に掬い喉をうるおし清涼感を味わった時
上村元義(神奈川県)

★花火

・ 花火の時とお盆の祭りで幼友達がかきて、なつかしく、話はずみ楽しい時
五十嵐陸博(新潟県)

・ 夏だからこそ浴衣を着て見る
大久保アヤ子(東京都)他

a Questionnaire

★祭り

- ・祭笛。傘踊りの鈴の音をきくとき
田中 昶(鳥取県)
- ・京都宇治の県祭り。その瞬間から私の夏が来ます
中山日出子(大阪府)

★夏服

- ・ノースリーブの若い女性を見たとき。そこに熱い太陽光が当たって、いけば最高
萬濃その子(神奈川県)
- ・ランニングを着て、短パン姿になったとき
中村康浩(福岡県)
- ・和服が袷から単衣に変わる時
山口千鶴子(東京都)
- ・国民学校の頃は帽子に白カバー、父のセルの着物姿と水泳許可
津田忠彦(岡山県)
- ・学生さんがまっ白な半袖の制服に身を包み軽やかに歩く姿
奥那於子(大阪府)

★蝉

- ・蝉の初声
大場艸月(長野県)
- ・朝起きてせみの声を聞いた時
渡邊 清(宮城県)
- ・朝まだき、くませみが元氣よく鳴く声
久本にい地(岡山県)
- ・うるさいほどの蝉時雨
佐藤 信(神奈川県)他

★蚊

- ・その年初めての「蚊」に刺された瞬間
小林七重(新潟県)
- ・憎らしい蚊の啼き声を耳許に聞いた時
鈴木蝶次(宮城県)

★蛙

- ・田に水が入り蛙が鳴き出すと「夏だなあー」と思う
中島光江(埼玉県)

- ・田んぼに水が入り早苗が植えられ夜になると蛙が一勢に鳴き出すとき
山田富朗(埼玉県)

★アイスクリーム

- ・孫のくれるアイス：冷たくておいしいです
清まさじ(静岡県)



- ・ソフトクリームの一丁目
中林恵子(大阪府)

★冷房

- ・冷房の効いた部屋
中岡昌太(神奈川県)
- ・冷房をかけ扇風機をまわしてその前で涼む時
片山茂子(埼玉県)
- ・デパートに入って涼しいと思った時
高崎登喜子(東京都)

★その他

- ・クリームあんみつを食す刻
緑川禎男(埼玉県)
- ・「ざるそば」を食べたいと思う時
吉里ひとみ(東京都)
- ・夏料理。せせらぎの音を聞きながら食事する
濱田イサオ(福岡県)
- ・苺を畑で取るとき
嶋田きよ子(奈良県)
- ・化粧くずれしたとき
平山千江(岩手県)
- ・鮎の解禁とその塩焼を食べるとき
阿部 至(埼玉県)
- ・「夏は来ぬ」を口ずさんでいるとき
関本 守(新潟県)
- ・外出時にサングラスを掛けたくなる時
近藤薫也(千葉県)
- ・日除けの帽子を被らずには外出できなくなった時
大阿久雅子(埼玉県)
- ・公園などの噴水の上がる様を見た時
山田良男(埼玉県)

- ・洋ダンスの中のお厚いコート類が、他へ収納されて空っぽ状態になった時
長谷川庄二郎(千葉県)
- ・冷たい水シャワーを頭から浴びて気持ちいいと感じられる様になった時
桑原謙一(群馬県)
- ・金鳥の蚊取り線香のCMが始まると「夏だなあー」と感じ、線香のかおりで実感です
和崎治人(山口県)
- ・日傘をさす女性が多くなったとき
井上氣海(広島県)
- ・農家からとうもろこしの予約販売のお知らせハガキが来たとき
一瀬正子(埼玉県)
- ・水を入れてアイスコーヒーを飲んだ時
関原幸子(東京都)

- ・夜が早く明けれることです。いつも早起き出来て健康に過ごせることが幸せ
道給一恵(埼玉県)
- ・八月十五日
小石澤英夫(東京都)
- ・ゴルフのプレー中「クラッ」としたとき
嶋田征次(東京都)
- ・雷鳴、雷雨、雷様に関する出来事
田野井一夫(栃木県)
- ・我家の窓を開け放題にした時
清水君江(埼玉県)
- ・「冷し中華」の幟を目にした時
杉浦俊雄(静岡県)
- ・夕方狭庭に散水し「甚平」を着て涼を取っているとき
菅井文男(新潟県)他

今回のアンケートは票が割れました。ビール好きが多い当社スタッフですが、でもそこは酒どころ新潟ーということで新潟の地酒300種以上を取り揃えている「新潟都屋」の店長、山口直樹さんに「生酒」についてご執筆いただきました。



新潟都屋
店長 山口直樹さん



新潟に冷酒と地元食材が美味しい夏がやってきましたー当店冷感ソーケースの中のお酒もブルーのボトルやフロストのボトルなど涼やかな瓶が並び賑やかに夏らしさを演出しております。では皆様「生酒」と言ってお酒は何かご存知でしょうか？通常日本酒は「火入れ」と言われる熱殺菌2回行います。先ず一回目はお酒を搾ってからタンクに貯蔵する前。酵母の活動を止め、貯蔵中のお酒の劣化を防ぐ為に行います。2回目はタンクからお酒を取り出し瓶に詰める時です。輸送中のお酒の劣化や「火落ち菌」と呼ばれるお酒の風味を悪くする乳酸菌の一種が入り込むのを防ぎます(近年の酒蔵は衛生環境と設備が整い火落ち菌の発生は殆どありません)。この2回の熱殺菌を一切行っていないお酒を「生酒」と言います。味は生酒ならではの柔らかい口当たりとフレッシュな風味が特徴です。新潟の夏は食材の宝庫。飲食店の手書きメニューには「茶豆」「十全なす」「佐渡産本マグロ」「山北の岩牡蠣」などが列記されます。ぜひ「生酒」と一緒に新潟の夏を満喫してみたいいかがでしょうか。

4-5月号へお寄せいただいたお声の一部をご紹介します！皆様からのメッセージが、私どもスタッフの励みです。率直なご感想や親身なアドバイス、いつもありがとうございます。皆様のお声で、情報誌「喜怒哀楽」がつけられていきます。

- ・マガジンがカラーで立派になりました。
- ・こころに響くことばがいいですね。私も夫を亡くし悲しみを通じて新しい生の幕開けに立ち会えるかも！
- ・菜根譚、今月は意外でした。「清貧の明治の父の景色かな」だけではいけなかった。生くるには臨機応変ですか。
- ・「もも句会」はち切れそうな若さのグループ、黒岩様の活躍を期待して岡山に届くよう大きな拍手を送ります。
- ・問森坦様の飾り気のない率直な語り口、よき人生に感銘しました。
- ・和歌もいい俳句もいいね喜怒哀楽。これは川柳ですがみんないい。うれし泣きです。
- ・カラー印刷になってフォトイックが作句しやすくなった様に思います。
- ・宮野食品社長のコラム。新潟の桜餅は関西風なんですね。納得です。
- ・色々と広い地域を知る事が出来、楽しみに読ませて頂いてます。
- ・新潟ぶらりは写真とマッチし一度訪れてみたい気に誘われました。
- ・「にいがた文化の記憶館便り(13)」大橋佐平氏が「博文館」の創業者と伺い、私は博文館の三年連用日記を50年使用しており親しみを感じました。
- ・食楽句楽のすすめ「青春の木ポッキー」長男誕生の頃出はじめたポッキーでした。二人で働いてもいつも薄給で買えなかった頃がなつかしく思い出されました。
- ・老いも若きも楽しめる喜怒哀楽ありがとう。

※今号へのお声も、ぜひお寄せください！

新潟ぶらり

❖米百俵

長岡市の千秋というところに、米百俵の群像がある。ブロンズで出来ている大作で、山本有三の戯曲「米百俵」の一幕を再現しているものだ。

時代は明治のはじめ。戊辰戦争で新政府軍と徹底的に戦い、敗れた長岡のまちは焦土と化した。石高も減らされ、人々の生活は困窮していた。そのような中、支藩の三根山藩から贈られたお見舞いの米・百俵。配分を期待する藩士に「米を売り、そのお金で学校をつくる」との話が伝わる。刀を抜いて「米を分けろ」と迫る藩士に、「食えないからこそ学校をつくり、人物を養成し、本当に食えるようにするのだ」と説く大参事・小林虎三郎――。

山本有三が虎三郎に興味をもつきっかけとなったのが、長岡というまちへの疑問である。新政府側の藩ではないのに、山本五十六をはじめ多くの人物をうんでいる、これはなぜか、と。そこで虎三郎が人づくり（教育）に力を注いだ人物であることを知る。

小林虎三郎（二八二八一―一八七七）は



右から三番目、大きく手をのびしているのが虎三郎。終生病に苦しみ、晩年は「病翁」と名を改めた。
平成三年十月建。 住／新潟県長岡市千秋 3 丁目 1356

佐久間象山に学び、吉田寅次郎（松陰）とともに二虎と称された。象山は「我子を依託して教育せしむべき者は、独り小林子なるべし」と言い、虎三郎の教育者としての資質を高く評価した。一八五九年、虎三郎は『興学私議』を著す。ここで主張した、教育が国を興す根本との思想がいよいよ実践されたのが、米百俵が資金となった国漢学校である。一八七〇年のことであった。国漢学校は一九〇〇年に長岡中学となり五十六もここで学ぶ。

半藤一利が、疎開先の長岡に一人残り長岡中学（現在の長岡高校）に進学したのは、米百俵の話聞いたからだという。（菅真理子）



▲長谷川巳之吉



▲石山賢吉

その後、関東大震災や、大恐慌、金解禁、戦争など激動の時代を迎えます。その間も「ダイヤモンド」は内外の政治・経済の変化に即応すべく、記者の取材記事だけでなく政財界の有力人物に寄稿を依頼し、読者の好評を得ました。主な執筆陣に、藤原銀次郎（王子製紙社長など歴任）、小林一三（阪急東宝グループ創業者）、松永安左エ門（電力の鬼）と呼ばれた財界人）、石坂泰三（東芝社長などを経て経団連会長）な

同誌が創刊された年は、日本は不況の中にありました。しかし翌年、ヨーロッパで起こった第一次世界大戦の影響で、「大戦景気」が到来。起業ブームや株式市場の活気にもなつて、雑誌の売り上げも毎年伸び続けました。自由主義が発展した大正デモクラシーの時代でした。

◆石山賢吉（1882～1964年）
新潟市出身の石山は、1913（大正2）年4月、東京・八丁堀で「ダイヤモンド社」を創業しました。社名は「小さくてもキラリと光る」を motto に付けました。社を代表する経済誌「ダイヤモンド」は今年で創刊105年目を迎えます。

明治半ばから大正期にかけて、現在の出版文化の基礎が築かれました。いま大手出版社といわれる講談社（明治42年創業）や小学館（大正11年創業）などその頃に生まれています。前号に続き、当時、出版界で活躍した越後人を紹介します。

出版文化と越後人 2

秋岡 啓子

◆長谷川巳之吉（1893～1973年）
「第一書房」は1923（大正12）年6月、新潟県出雲町出身の長谷川巳之吉が東京・芝高輪で創業した出版社です。最初に出した松岡譲（長岡市出身で漱石門下の文学者）の自伝的小説『法城を護る人々』が版を重ねるベストセラーとなりました。

前号で紹介した「博文館」の成功以来、日本の出版文化は隆盛し、多くの出版社が生まれました。1冊1円の円本ブームも訪れ、本の大量生産・大量消費が進む中、第一書房はあえて少数生産の豪華本を出版し、独自の文化を築きました。長谷川は創業の趣意として、当時の出版社がただ営利しか考えていないことに憤り、「本来出版事業なるものは、単なる一片の営利事業ではなく、それは実に文化の基礎工事ともいべきもの」と理想を語っています。

長谷川は、本の中身である詩や文学にふさわしい装幀の豪華本にこだわりました。たとえば堀口大學（長岡市育ちの詩人）の『月下の一群』初版は、背革装、天金の装幀で、彫刻家・長谷川潔の木版画が添えられた美しい本です。

第一書房は何冊ものベスト・セラー、ロング・セラーを持つ中堅の出版社でしたが、1944（昭和19）年2月、長谷川は突然廃業を選びます。戦時統制下、出版企業の統合が進む状況下での決断でした。

当初月刊誌だった「ダイヤモンド」が現在のような週刊誌になったのは、1958年10月からです。日本は戦後の高度経済成長期に入り、それに合わせて雑誌も変わらなければいけないと石山は考えていました。石山は常に時勢に目を向け、生涯一記者として多くの著作を執筆しました。



▲堀口大學
『訳詩集 月下の一群』
1925年

【企画展示情報】

「出版文化と越後人～博文館、実業之日本社、ダイヤモンド社、第一書房～」

会期：4月7日（金）～6月25日（日）

休館日：月曜日

食楽句楽 のすすめ(14)

メロンの自縛を解く

岩田 桂

メロン(夏の季語)を切るぞと言えば、部屋に籠りがちなバラバラ家族が一斉に居間に集まってきます。二階からも転がり降りてきます。メロンは人寄せパンダ、いや家族団欒のコーディネートなど世間では噂されています。

まさかと思うのだが、五〇%前後の人々は、メロンにそのような淡い期待感を抱いています。その家族を一堂に集めるメロンについて、やはり感謝と期待を込めて書き留めておかねばなりません。そのメロンには

一、マスクメロン(麝香の香りがする)

二、プリンスメロン

三、ハネジューメロン(アメリカ系)

四、夕張メロン(オレンジ色のスペイン系)

等があります。

夕張メロンなどは一個一万円程度するものもあり、古今東西の果物界のキングに君臨しています。まず減多に口には入らない羨望の一品です。ですから社用の贈り物や賄賂代わりに頻繁に使われる一品です。まさに密事がらみのメロンくんです。

ところで皆さんは、デパートでメロンを買ったことがありますか。その時「ご自宅用ですか」と聞かれましたか。いや、ないでしょう。大体「ご進物ですね」と聞かれたはずです。一度は自宅用だと言ってみたいが、そんな付き合いができません。すよね、お嬢様育ちのメロンさんとは。そのへんが悔しくてならない。地団駄踏んでもその情けなさが消えないです。すよね。まあいいか……。

ところが何の間違いか一万円のそのメロンが、

わが家に届きました。そうなるわが家には、いろいろな動揺や陰謀がまき起ります。

届くよりはや動揺のメロンかな

普通は、まずは仏壇にお供えして、とりあえずの動揺の沈静化を計ります。

しかし仏壇からは、かすかな麝香の匂いが流れます。誰彼となく、入れ替わり立ち代わり仏間に現れて、しかも必ずメロンを指の裏側でコンコンと叩き始めます。メロンにとっては、このご挨拶はありがた迷惑に違いありません。「頭を叩かれるような悪いことはしていません」という気持ちがあります。

なのにメロンは容赦なく頭を叩かれます。スイカを叩いてその完熟度を測る、日本民族の癖がなせる無意識の挨拶行為です。最近では、メロンの食べ頃を計るセンサーが開発されたと聞かれます。まだまだコンコンと叩く、コンコンセンサーが幅を利かせます。問題は誰が「よっしゃあ、今が食べ時じゃあー」と決を下すかです。通常はおばあちゃんか、七人家族全員に、「何時、何処で」を正確に平等に伝えねばなりません。メロン共和国は、平等を旨とする民主主義だからです。

いよいよ時期到来です。固唾をのんで囲む七人家族に見守られながら、メロンに包丁が入れられます。包丁が入ると部屋中にかの香りが、ポワァ〜と充満します。

メロン切る卓に固唾の貌集む

七人家族ですから、七等分に正確に切り分けなければ、大騒動になる可能性があります。とりあえず不揃いながらも八等分に切り分けます。次はそのメロンの切り身を選ぶ順番が問題になります。



普通はお兄ちゃんから、あるいは小さい子の順から選ぶのが順序です。となると五人兄弟の三番目の子は、永遠に一番籤をもらえません。

ここで「今日は真中からの順にして!」と、懇願する羽目になるのであります。何故か三番目って、いつも無視され、疎外された歴史があり、それが怨念にまでなりつつあります(本当)。

中の子がいつもせつかつちメロン切る

「食べ物の恨みは怖い」という古事は、実はメロンから来ています(まさか)。これを不当順番監視委員会が、問題として提起したと聞きますが(ないか)。これは納得です、大納得です。

このように一見、平和な果物の王様のはずであるメロンがまき起す騒動には、人生の機微が隠されています。外見性、見栄、対面性、怨念性、家族の信頼性などの、本来あつてはならない葛藤のドラマがメロンにはあります。

しかしいつも不思議に思うことがあります。メロンの表面には必ずある、あの網目のことです。あの網目は何のためにあるのでしょうか。鳥害からわが身を守るためのメロンの自衛手段なの? 更にはメロンがキングとしてのプライドを、誇示するための自縛の網目だという人もいるがどうだろうか。

しかしその網目の謎はまだ解明されていません。まさに箱入り娘ならず網入り娘です。

そのせいかメロンは家族に切り分けられてやっとな縛の重荷から解放されます。ほっとした状態で、「おまたせしました」と家族の口福に貢献するのです。果物本来の責務を果たそうとするのです。どうですか、このような新説は。

でもやっぱり結婚式やディナーのフルコースの最後を飾るのは、メロンを於いて他にはありません。夢の世の果物のキングが故の定めなのでしょう。

自縛解く華燭の宴のメロンかな

第24回丸山薫募集について

日本の現代詩に多大な業績を残した詩人丸山薫を顕彰し、没後20年を期して創設された『丸山薫賞』も今年で24回を数えます。ふるってご応募ください。

□対象詩集 平成28年4月1日から平成29年3月31日までに刊行された現代詩集（奥付の発行年月日による）

※翻訳、復刻、再版、遺稿集及び全詩集、選集、外国語による詩集は除く

□応募方法 詩集1冊と詩集名、郵便番号、住所、氏名（筆名の場合は本名も）、年齢、性別、電話番号を別記し送付。応募詩集は返却しません。

□応募先 440-8501 豊橋市今橋町1番地 豊橋市役所「文化のまち」づくり課内 丸山薫賞運営委員会事務局

□締切 平成29年6月30日（当日消印有効）

□発表 平成29年9月（予定）

□賞 正賞楯及び副賞100万円

□選考委員 菊田守、新藤涼子、高橋順子、八木忠栄、八木幹夫（50音順）

みんなのエッセイ「わたしの母」が完成しました！

5月の母の日に向け企画された合同のエッセイ集「みんなのエッセイ わたしの母」が過日完成し、ご投稿くださった方にお送りいたしました。大きなバラが小さなバラを包み込むようにデザインされたこの本のサイズは、縦175mm×横118.8mm。118.8＝どの母もみんな「いい母」となっています。そして内容はというと、お一人の原稿量はたった300字でも、いえ、たった300字だからこそ凝縮された人生が垣間見え、その方だけの明治、大正、昭和、そして平成を生きている個性豊かな母が立ち上がってきます。

「みんなのエッセイ わたしの母」を読みたいという方は、お問い合わせください。（連絡先 P16 下部参照）



当社のFacebookあります！

当社はホームページ、ブログのほかFacebookがあります。本や日常の仕事に関する様々なことを定期更新していますので、ぜひのぞいて「いいね♡」を押してみてください。

Facebookもチェック 

ポストカード販売しています

本号（92号）に同封したポストカードは「ツクバネ」。春夏秋冬32枚の絵柄が一冊になったポストカードブック（1,500円）、各季節8枚（500円）のいずれも取り扱っております。必要分の切手を同封のうえ、封書にてお送りください。



「ご投稿ハガキ」について

「喜怒哀楽」をご購読いただいている皆さま宛での送付書と一体型の「ご投稿ハガキ」についてです。これまでは、当方でお名前と都道府県を印字のうえお送りしておりましたが、信書に該当するということが明記できなくなりました。お手数をおかけいたしますが、お名前と都道府県のご記入につきましてご協力のほどお願いいたします。



スタッフの一言

Q. 一番「夏だなあ！」と思う瞬間はどんなときですか？

木戸敦子



学生時代に読んだアーウィン・ショーの「夏服を着た女たち」。NYを舞台にした男女の織り成すおしゃれな短編は期待通り。夏にはこうありたいと思っていたが、実際は家でアツパッパを着て「あっちえ〜」。

古川久美子



うっかり半袖で外に出てしまった時の、肌が焼かれる感じ。痛みに「もう夏か!!」と。車の窓ガラスに、虫がバツンバツン当たって来る時もかなあ。

菅真理子



夜、遠くの田んぼから聞こえてくる蛙の大合唱。素晴らしいBGM、夏だなあと感じます。そして、なんだかよく眠れるような気がします。

木伏美恵



パジャマが半袖になり、お布団を掛けなくても気持ちよく眠れるようになったとき。シーツが夏仕様になりサラサラして、色も爽やかに系で気持ちがいい。

上村真智子



刈っても刈っても伸びる草、あちらは草刈終了と思ってこちらを刈っていると2週間後にはまた生えている…エンドレスな草刈をしている時！汗を拭いっつなげかこれがストレス解消になる！

金子ゆり子



蚊取り線香のコマースタルが多くなったとき、野菜や花に水をあげる回数が多くなったとき。スイカを美味しく食べることが出来たとき。

石山由希子



毎朝8時の印刷室。部屋に入った瞬間に季節の移ろいを感じます。5月も下旬になるともう25℃、夏ですね。8月くらいになると30度超。日中は機械の熱でエアコンなしでは居られません。

吉田瞳



夏にしか聴けない音楽がラジオから流れてくると夏だなあ！と感じます。夕涼みしながらのビールと枝豆を食しながらBGMは夏曲で。あとビアガーデンも。酒にまつわることばかり（汗）

山田千秋



朝干した洗濯物が夕方カラッと乾いているときです。お日様の匂いがついた洗濯物にうっとりです。夏は大好きです。一年中夏の国に住んでみたいくらいです。



名古屋の雨

岡田幸生

高速バスで名古屋に向かう。山とトンネルの飛騨高山をひた走りに走り、濃尾平野に出たときの感動とまったくなかった。ちょうど雲間から日が差して、たまたまかかっていたモーターが神の音楽に聞こえた。

またインドに行きたい。でも簡単にはいかないし、実際のところ、私のインド愛はほとんどカレーでできている。本場の味を満喫することができれば、どこだっていいわけだ。それで適当な店があり、行きやすい名古屋に、一泊二日の現実逃避フラグが立ったのである。

昼前に着く。五月晴れ。名古屋は美しい都だ。老若男女が信号を守り、広い歩道を闊歩している。若人の多くはマスクを着けている。自転車は止める所に困らない。出先に乗り付けなければならない。誰に物を聞いても反応がいい。

名駅でハイデラバードの濃密なピリヤニを味わった。クルフイやチャイも美味。東桜の美術館でムンクの絵を見た。宿は錦のカプセルホテル。サウナで汗をかいて、ビールを酌んだ。小確幸。味噌きしめんもたまらない。狭い寝床に横になると、インドに遊んだときのことか思い出された。

深夜に寝台急行を待ちあぐねている。到着ホームはわからない。駅員はつかまらない。人に聞いてもおぼつかない。列車が来るたびに、ホームからホームを走る。知らない駅に降り、知らない町を歩く。町は敵意に満ちている。夕方で空腹なのに、宿は決まっていけないのだ。バックパックが肩に食い込む。宿が決まり、身軽になって食事に出ると、風向きは変

独特の世界観を持つ岡田さんのエッセーも最終回。日本語は実に多彩だということ、つぶさに見せていただきました。次回からは、岡田さんいわく「短歌も俳句も、そして実作も批評も、もれなくすこい人」のご登場です！

わっている。人も並木も街灯も、私に優しく微笑んでいる。

翌日は雨。錦のカフェのエスプレッソで目を覚ました。東山動物園の雨に立つカバを見た。昼は電車で郊外に出て、チェンナイの優美なミールスを楽しんだ。エントロピーと幸福の度合いは比例する。指でまて口に運んだ。

市街に戻る車中で、二人の女子高生がしゃべっていた。なぜか「オウム真理教」という名前が出る。

「あれなんていったっけ？ 名前名前」

「アソウじゃないよね？ アだよね？ アソウ違うよね？」

アサハラか。思わず声が出かかるが、こらえた。環境を破壊してはならない。小さく息を吸って吐く。

彼女らはスマホをいじっている。二人ともなんと豊かな黒髪だろう。私の髪はどこへいった。昔は前髪がうるさいほどだったのに。ないと寂しい。髪は兜なのだ。

「あれなんだっけ？ カタカナだよね？ ドムだっけ？」

ドム違うでしょう。知らないんだ。しかたない。時代が違う。しかしなんとという時代だろう、としみじみ車窓に目をやれば、名駅の高層ビル群が遠く雨に煙っている。マラーのアダージョのような雨だ。

「ああ、アサハラだ！ アサハラアサハラ。これ髪かわいくない？」

「松崎しげるやよこれは」

「ポアだった！ ポアポア。ポアするぞ！」

とか言い合って笑っている。私も帽子の陰で笑った。

2017.6-7. vol.92 (2017年6月10日発行/隔月発行)

●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション

喜怒哀楽書房

〒950-0801 新潟市東区津島屋7-29

TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550

株式会社ミュージズ・コーポレーション

0120-819-395 Facebookもチェック

e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

郵便局口座番号00530-4-81370 口座名 株式会社 ミュージズ・コーポレーション

編集後記

午年につき「また馬齢を重ねまして…」と毎年5月になると言っている。年齢だけは確実に増え、とうに折り返し地点を過ぎたのに、いつまでも「馬齢」なんて言っていてはダメだろう、と思う。来月も来年も、自分も周りも変わりなくいられる確証などどこにもないのに。「いつやるの、今でしょ！」とテレビで林教授は言っている。今号でご紹介した谷知さん(P4)も、自分のやるべきことを定め、いつまでにという日付を入れ、一つひとつ実行していた。優先順位が…云々などという言い訳もなく、自分の人生の手綱、しっかり握っていかないと。(木戸敦子)